

希望の光

(明治四十二年寮歌)

加藤茂雄君 作歌
金原善知君 作曲

一

希望の光仰ぎつつ
思へば友と尋ね来し
山は紅朝日子の
燃ゆる姿に似たる哉
嘶く駒は秋に肥え
我等が門出栄ありき

二

ああ冬寒し北国の
大野の果を眺むれば
雪かあられか空たえて
限りは知らず暮るとも
我等が胸に黙想あり
星の光に啓示あり

三

黙想を胸に結ぶ時
啓示を空に望む時
見よ下萌ゆる若草の
息吹さやかに風薫る
春は来れり春は来ぬ
物皆此処に力あり

四

春の光の照る所
色を交へて咲く花に
蝶舞ひ鳥は轉りて
我等が血潮躍るなり
斯くて見渡す行手には
光蔽はん影もなし

五

深く霞に鎖されて
都の様は知らねども
夕孤雁の声聞けば
人太平に眠るとや
吹雪に練りし双の腕
鳴るよ常盤の夢醒ませ

六

四年の昔人々の
軋り建てし我が寮に
春立ち還る時よ今
希望の光新なり
さらば起て友諸共に
我等起つべき時なれば